
家の迷宮へようこそ

石室悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家の迷宮へようこそ

【Nコード】

N2051I

【作者名】

石室悠

【あらすじ】

冒険者のルヴァは、ある町を訪れ、町民に頼まれて暗黒魔術師の退治に向かい、そして何故だか標的と一緒に迷宮に落ちてしまった。グランデールシリーズの過去編、序章的な物です。

そこは、家だった。

確かに家としか言いようは無いが、おかしい事が多い。

まずもって、床が平面ではない。斜めに傾き、その先には壁があるが、手の平ほどの小さな扉しか付いていない。まして、天井と思われる場所に正規の扉がついていたりする。

階段は有るが、昇りにも関わらず、その先には何故か床が見えている。下り階段に到つては、行き着く先が、壁。

床に窓が並び、天井に扉が並ぶ。もはや、何を以って「床」「壁」「天井」と呼ぶべきなのか、全く判らない。トリックアートの中に迷い込んだような世界だった。室内は凸凹に張り付きあい、まるで部屋の絵を、グシャグシャに丸めて、もう一度開いたかのような有様。

そんな家の中に、二人の青年が立っていた。

一方は、金の長い髪を結わえた、長身痩躯の青年。豪華な服を着込み、いかにも「貴族です」といわんばかり、紅の外套を身に付け、腰にはレイピア、肩には弓と矢筒。端正な顔立ちで、理知的な緑の瞳は、もう一人の青年を見つめている。

その視線の先には、正反対な印象の青年が立っていた。黒い長髪で、紺色のローブを身に着けている。中性的な顔で、表情は陰鬱。黒い瞳は目の前の青年ではなく、この家の天井を見つめている。

そして黒い髪の青年が、呟いた。

「……どうして、こんな事になったのだろう……」

嘆息交じりの言葉に、金髪の青年は大きく頷いて、答えた。

「お前がこんな迷宮作つたからに決まってるだろうが！」

その言葉に黒髪の青年——イードは、金髪の青年——ルヴァを見る。

「……そうだろうか？」

「そうだった！」

ルヴァは改めて怒鳴る。イードはやはり得心がいかないらしく、首を傾げていた。

彼らがそこ……『家の迷宮』に迷い込んだのは、つい先程の事だ。もつとも、ルヴァとイードが知り合ったのも、その少し前でしかないのだが。

ルヴァは元々、冒険者だった。彼はある物を探す旅をしているのだが、それはまた別の機会に語るとする。

とにかく、彼は偶然、ウィードという村に立ち寄った。

ルヴァはディラという、女の魔術師と二人で旅をしていた。

ディラは、露出の高い怪しい服に、ショッキングピンクのベリーショートという、奇抜な容姿の女だ。しかし、魔術師としての実力はそこそこで、特に医療系が得意だった。いわゆる、プリストとしての才能が有る。

ウィード村で慈善を目的に、ルヴァとディラは臨時医院として活動した。怪我や、軽い病気なら治せるとあって、村人は二人に頼る。正規の医院は治療費が高すぎて、庶民には手が出ないのだ。

村人達は二人に感謝して、礼をしようとするが、ルヴァは笑って断り、

「他に、お困りの事は無いですか」

と尋ねる始末。村人達は彼を信頼して、相談した。

「実は、沼地の辺りに、怪しい人物が住んでいるのです」

怪しい人物は、まだ若い男の魔術師だという。それも、よろしくない事には、暗黒系の。

男は沼地に屋敷を構え、それをどんどん、変な方向にリフォームしているらしい。それはもう悪趣味で、紫色のハートが置かれ、ドピンクの悪魔像が建ったりと、違う意味で危険なのだそうだ。

そこで、村人達はルヴァに、この不審人物の追放を願ったのであった。

ルヴァは二つ返事でOKを出し、さっそく件の屋敷に向かった。

屋敷は確かに、すさまじい事になっていた。これほど悪趣味な建築物は、おそらくこの世界が終わるまで待っても、他には出現しないだろう。

ピンクと紫を基調とした、配色も構造も、ましてオブジェに及ぶ全てが、住居としてはあまりにも脈絡が無い。

逆に、そのヤバさが全体に共通している。いちいちハート型がそこから中に散りばめられ、確かにピンクの悪魔像が有ったが、その悪魔でさえ、着ている服はハート柄だったりする。

おかしい、コイツは本物のヤバイ奴だ。かなりイタイ。

ルヴァとデイラは、ある種の覚悟を決めて、屋敷に乗り込んだ。

小さな屋敷の中。書斎と思われる一室。一人の男が、なにやら怪しく実験器具を振り回していた。ルヴァはすぐに突入し、「覚悟しろ、変態」とレイピアを抜く。

「なんだ貴様は」

男……イードは（屋敷にイード・ルデ邸という看板がかかっていたので、そう断定されている）不愉快そうに振り返り、二人を見る。「私はルヴァ、この世に平和をもたらず、正義の使者だ！」

今時ありえない決め台詞を吐くルヴァに、イードは「ははは」と高らかに笑って言った。

「時代遅れの凡人め。何をしに来たかは知らないが、私の才能を確かめる実験材料にしてやろう」

そしてイードはその右手から魔術式を展開した。円形のそれが彼の手から離れ、部屋中に広がる。

「ルヴァ、危ない！」

デイラが勘付いて叫ぶが、もはや手遅れだった。

イードは封印系魔術を展開したようだ。眩しい光に包まれたルヴァはいつのまにか、見た事も無い奇妙な家の中に居た。

そして、

「ははは、思い知ったか。私の作り出した『家の迷宮』で朽ちるがいい！」

と高らかに笑う、術者本人も、何故かそこに居る。

「……あのさあ」

「なんだ、凡人」

「……なんで、アンタもここに居るわけ？」

「……」

ルヴァが思わず尋ねると、イードはしばらく呆けたような顔をして、そして、

「……あれ？」

と、間拔けな声を出した。

それが、数分前の出来事である。

「大体、どうして罫を作った本人が、その罫にはまってるんだ！」

「まあ、罫と総称される物は、往々にして作用者を選べないものだ」

「自分にだけは効かないようにしとけよ！　そして出口ぐらいは知っておけよ！」

先程、ルヴァはイードを殺そうとした。が、イードがそれを制す。

ここは『家の迷宮』。イードオリジナルの世界型魔術で、正解の扉以外は無限に部屋が続いている。イードが死ねば、迷宮は無に帰すが、同時に内部にある物も消滅する。つまり、ルヴァも死ぬ。

イードが説明すると、ルヴァは舌打ちしてレイピアをしまった。

そして、出口を尋ねたが、イードは「さあ、知らぬ」と首を傾げるばかりだった。

かくして、二人は仲良く出口捜しをするハメになってしまったのだ。

「大体、自作の魔術はモルモットとかで実験して、デバックしておけ、二流魔術師め」

「魔力の無い凡人が何を言うか。第一、実験などと……モルモットが可哀想ではないか」

「俺だったら良いってのか、この偽善者！」

「暗黒魔術師に善人など、居てたまるか！」

ルヴァとイードは口論を続けながら、『家の迷宮』を歩き続けた。階段を昇れば、何故か窓に辿り着く。窓を開くと、その先は次の部屋。扉を開くと、床が天井に変わり、シャンデリアの隣の扉を開くと、暗黒が広がっていた。

「あ、その黒いのは虚無だから、入ると死ぬぞ、凡人」

イードがボソツと忠告する。ルヴァは慌てて扉を閉めて、「さつさと言え、変人！」と叫ぶ。

「どうなつとるんだ全く。意味が判らんぞ」

「常識に捕らわれていては、先に進めないという事だ」

「ほーう、大口叩く前に出口を見つけて欲しいもんだがな」

言い合いながら歩くが、行けども行けども、家はひたすらに家だった。迷宮と言うだけの事はある。

もうどうにでもなれ、と諦めかけていたその時、ルヴァが物音に顔を上げる。何かを引きずるような音が聞こえた。しかも、少しずつ近付いているようだ。

「おい、変人。あの音は何だ」

尋ねると、イードも顔を上げて、そして言った。

「……巡回型の殺人魔術式を組み込んだ覚えがある」

「何？」

「……迷宮の中で、いつまでも標的が生きていたら困るから。手っ取り早くトドメがさせるように、殺人鬼型の魔術を」

「おい……それって……」

「うむ、ヤバイ。見つかったら殺される」

イードはあっさり言って、そしてルヴァを手招きした。

「奴は広い空間が好きだ。狭い部屋を探そう」

そして二人は暖炉から煙突を抜け、そこに有った狭い倉庫に隠れた。

「闇雲に歩き回っても無駄なのだ。それが、迷宮と言う物なのだから」

殺人鬼が入って来ないよう結界を張って、イードは呟く。彼はそのまま壁にもたれ、座り込んでしまった。

良く考えると、イードは魔術師だ。華奢な体型を見ても、今まで口々に運動してこなかった事は良く判る。それが、今まで歩き詰めだったのだ。相当の体力を消耗したのだろう。

ルヴァはそれを溜息混じりに見て、自分も座った。迷宮の作成者が出られないようでは、自分がどんなに頑張っても、可能性は無いと感じたようだ。

二人はしばらく黙って居たが、やがてルヴァが尋ねた。

「おい、変人。お前はここで何をやっていたんだ？」

「私には、イードという名があるのだぞ、凡人」

「……俺にも、ルヴァという名がある。イード」

「……」

イードはルヴァを一度見て、「ふん」と目を反らす。

「私は、ここで実験をしていたのだ」

「何のだ？ 暗黒大魔王ベルメンゾとかの降臨実験？」

「違う。大体、何だそれは。……凡人には考えも及ばぬだろうが、

私は暗黒魔術の、暗黒たる部分を除外しようとしていたのだ」

「……それって、ただの魔術じゃないのか」

「は。暗黒が暗黒たる所以は、光が有るからだ。光もまた暗黒無くして、光たりえない。暗黒魔術には、それが担うべき必然がある。ただ、それが今までは、命の犠牲や、怪しげな儀式を必要としていた。その部分を消せば、暗黒魔術に忌むべき所は無くなるはず……」

長い歴史、暗黒魔術は忌まわしきものとして、敬遠されていた。

けれど、無くなれば困る物でもあった。

光だけでは、安らかな眠りを求める死者を導けない。葬儀と同レベルで、暗黒魔術は必要なものだ。

しかし、世界は彼らを迫害しながら、必要とする。存在が無ければ困るというのに、人々は暗黒魔術師達に石を投げ、罵倒を浴びせた。

イードもまた、そうした迫害を受けて育ったのだろう。

「それが完成すれば、……誰にも文句を言われずに済むと、思ったのだ」

なかなか上手くいかなくて、変な物ばかり出来た。もったいないから、屋敷に飾り付けていたのだ。

イードの言葉にルヴァは納得して呟いた。

「それで屋敷が異常に悪趣味だったのか。……それにお前、悪い奴じゃないんだな」

その言葉にイードは驚いて顔を上げる。

「普通に頑張ってるのに、……疑って、変人とか言って、悪かった」

「……そういうお前も……ただの正義バカでは、無いようだな」

イードは苦笑して、そしてルヴァを見た。ルヴァもまた見つめ返す。

「イード……」

「ルヴァ……」

ここは密室である。しかも、狭い。狭い室内に、二人つきりである。まして、出られる希望も無い。

そうした状況で、芽生える物もあるという。幸いな事に、ルヴァもイードも、結構な美形であった。

「……」

「……」

そして彼らは、長い間、見つめ合い、そして、

「……だ、だああああ！」

ようやくルヴァは我に返り、イードを掴むと、壁に放り投げた。

「ぎゃ！」

イードにとっては災難以外の何者でもない。壁に頭をぶつけて、イードは唸っている。そしてルヴァも違う意味で唸っている。

「よせ、よせ、バカ、俺のバカ、目を覚ませ、ルーヴァイス！」

何か勘違いしかかったらしく、ルヴァは必死で己に言い聞かせている。

そんなルヴァに、イードが声をかけた。

「……ルヴァ」

「よせつ！ 今、声をかけるな！ あらゆる意味でヤバいんだ！」

「いや、確かに大変だ。見てみる。壁が……」

「何？」

イードの言葉に、ルヴァが恐る恐る彼を見た。すると、イードが頭をぶつけた壁が、僅かにひび割れ、開いている。その向こうからは、まばゆい光が差ししていた。

「こんなに明るい光は、外にしかない。ここが出口なんだ。壁じゃなくて、これは扉なのだ」

「な、なんだと！ よし、そこを開けてみよう！」

二人は協力して壁を押した。ルヴァは非力なイードを助けながら、壁の形をした扉を開く。

そして眩しい光が、辺り一面を覆いつくした。

「ルヴァ！ 大丈夫？」

ディラの声に、ルヴァは目を覚ます。見ると、イードの居た書斎に戻っていた。

「ディラ、俺は……」

「もー、心配したのよー。でも、しばらくしたら勝手に帰って来て、良かったー。大丈夫？」

「あ、ああ……。……イードは？」

「え？ ああ、あそこ」

「そうか……って、うわああ、デリラ！ 何やっとなんだ！」

ルヴァが起き上がって見ると、イードはそれはもうグルグル巻きに縛り上げられ、猿轡までされて、ウーウー唸っていた。

「だってコイツ、死刑でしょ」

「勝手に殺すな！ 悪い奴じゃないんだ、放してやろう」

「えー。ちよつと前まで、殺す気満々だったのに。ルヴァ、変なの」
不服そうなデリラに、事の次第を説明する。悪人ではないと伝えた。とりあえず、間違いが起こりかかった事は秘密にしておく。

解放されたイードは体中を痛がりながら、ルヴァに言う。

「もう、私の事は放っておいてくれ……」

しかしデリラが首を振って言う。

「無理じゃない？ 少なくとも、ウィード村の連中はアンタの事、キモがつてるし。あたしらが帰ってもそのうち、また誰かが追い出しに来るよ」

「ううむ……」

イードは頷き、そして俯いた。それを見てルヴァが提案する。

「おい、イード。俺達と一緒に旅をしないか」

その言葉にイードもデリラも顔をしかめた。

「はあ？ ルヴァ、カンベンしてよ。こんな根暗そうな男……」

「デリラ、これも覇行の一環だ。……イード、一緒に行こう。一箇所に居るから、皆から嫌われるんだ。転々としよう。そうしながら、例の魔術を完成させればいい」

訳の判らない理屈に、イードは困惑する。

「……しかし、私は暗黒魔術師だ。お前らのような凡人共と、旅など」

「何言ってるんだ。常識に捕らわれてちゃ、先に進めないんだろ」
が

ルヴァの言葉に、イードはハツとし、そして苦笑した。

「……そうだな……」

その言葉を肯定と取ったルヴァは、イードに手を貸し、立たせる。

「ほら、そうと決まったら荷造りだ。新たな世界へ旅立つんだぞ、イード。荷物は最小限にしろよ」

「ルヴァ、どーゆーつもりなのよ」

イードが荷造りをしている間、ディラは不服そうにルヴァに尋ねた。

「俺の覇行は、人脈とギブアンドテイクで成す。イードは優秀な魔術師だ、あれだけの迷宮を作れるんだからな。人材としては申し分ない。……色々、問題は有るが」

「はーあ、王子ルーヴァイス様の覇行って、随分遠回りなのね」

ディラが溜息交じりに言うと、ルヴァは「大器晩成す」とだけ答えた。

「待たせたな」

声に二人が振り返ると、小さなトランクを持ったイードが居た。

「よし、イードの門出に、今夜は乾杯するぞ。とりあえず、祝杯だ。次の村まで進んで、大いに飲もう」

「ちよつと、お金無いんだから、控えめにしてよ」

「俺より飲むくせに、何言ってる。さ、イード。上を向いて歩くだぞ。世の中にはいい事がいっぱいある。苛めてくる連中だけじゃないからな」

「沼地で上向いてたら、こけるわよ」

「……お前達、面白いな」

イードが少しだけ笑って言うと、ルヴァも面白そうに言った。

「常識外れの、面白三人パーティーだ。仲良くやっていけそうだろう?」

「……そうだな」

イードは笑んで、そして屋敷を後にした。

ぬかるんだ道には、三人分の足跡がついていった。

（後書き）

3年ぐらい前に、5ページでお願いと言われて書いた話です。四苦八苦しながら5ページに収めた記憶が有ります。

ルヴァは、グランディールの登場人物の親にあたります。よろしければそちらもどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2051i/>

家の迷宮へようこそ

2010年10月8日15時07分発行